

## 恥ずかしいこと

木坂 広一

解決しがたいことって周辺に生じるもので、大したことではないのだが、大きな出来事でもあったりした。たとえば他人に内面を見すかされたり：

結婚して最初に杉並区に住み、その後の中野区の団地に移り、子供が一人いる。右隣は数年間に二組が変わり、三度目には三人家族が引越して来た。細君と子供は見かけるが、亭主はまだ顔を合わせたことがない。松木正彦ほど人付き合いの嫌いな人間はいなくて、何より濃い関係になることを恐れ、だから新しい隣人が気になった。

「お隣はどんな人達なの」

松木は妻ののぶ子に聞いた。

「普通の人達よ」

「イヤな性格の人でなければいいがね」

「そんな人達ではなさそうね」

松木は独身の頃は隣近所など意識しなかったが、一家の主になるとそうはいかない。大方のことは妻が前面に出て処理しているが、しかしやがて悩ましいこと

に気がついた。右隣の亭主が子供と遊んでいるのを見て、どこかで見たことがあるような気がしてならないのだ。

「あいつかも……」

段々と甦って来た。間違いないだろう。独身の頃、石神井公園に近い南田中町に住んでいて、アパートは夢丸荘と言ひ、木造の二階建てで真ん中が通路になっていた。大家も管理人もいないから監視されたり干渉されたりすることもなくて気楽だった。右隣に若い男女が引越してきたのはいつ頃だったろうか、隣同士と言っても接点がないから顔を合わせたこともなく、大方同棲中の男女に違いない。共用の郵便受けには山野とあった。

ある夜更け、夢現ゆめうつらに子犬の鳴き声が聞こえて来た。

晩秋で冷え込みが厳しく、犬も寒さに震えているのか弱々しい哀れな声である。あまり煩くて目が覚めてしまった。だが犬ではなくてセックスの最中の嬌声であった。それが寒さと飢えで犬が鳴いているという夢に

なつたわけだ。以来、隣のエロスに夢中になった。二十八の彼は無関心でいられず、その度に壁に耳を当てた。嫻々とした声に興奮し、大団円に向かうと、部屋 of 整理箆筒がコトコト音を立てた。妻は丸顔で十九か二十歳、夫は三十前後で人好きのしない顔つきをしている。休みの日、アパートの庭でバトミントンをしているのを見たことがある。キヤアキヤアはしゃいでいるのだが、空虚な幼稚な青春という感じがした。

夫婦(?)はよく口喧嘩をした。男が身勝手な論理で攻めて泣かせ、後から機嫌を取って元の鞘に収めるというのがいつものパターンだった。他人の家のイジメとはいえ、聞くに堪えなかつた。男は隣近所とよくトラブルを起こし、松木もCDの馬鹿でかい音に文句を言いに行ったことがある。ドアをノックすると女が出て来た。

「音が大き過ぎますよ」

「彼に話しておきます」

「日曜の朝っぱらから、ひどいなあ。旦那は？」

「トイレに行っています」

「待っていますよ」

「うんちだから、遅くなります。すみません」

松木は仕方なく戻ってきたが間もなく音は止んだ。

女を可愛いと感心したものの、可愛いだけで社会性がまるでなさそうだった。

松木の勤めている会社は新宿にあり、大手の電気会社で彼は倉庫の管理を受け持っていた。西武線の電車の中ではよく週刊誌を読んだ。ある朝、電車が富士見台駅を通り過ぎるとすぐに富士山の稜線が見え、松木は雑誌から目を離して全体的な形を見ようとして体をこごめた。瞬間、大きく揺れてよろめいた。すると、「ちゃんと立っているとゆうんだよな」

という声がし、連れの女がクスクス笑った。そのカップルがアパートの隣人であることは既に知っている。男は松木を非難したのか、妻をからかったのか判然としかね、もし松木だとしたらこんな不愉快なことはない。せつかくの富士山も台無しである。あの頃は東京からよく見えた。

気を取り直してまた週刊誌に目を通した。車内は段々と寿司詰めになって来て、読むわけにはいかず、丸めてコートポケットに突っ込んだ。電車は終点に近づき、やがて池袋駅のホームにすべり込むうとしていた。停車する寸前に靴の上でバサツと音がした。ポケットの週刊誌を落としたに違いないから、彼は聞こえよがしに「あつ、いけない」と言っつけてしゃがんだ。

満員の中ではかなり強引な仕種である。拾ったと同時に扉が開き、外に押し出され、歩きながら手にしているものを見てアツと思つた。それは『旅行の友』という雑誌だつた。コートに手をやると、一冊スッポリと収まっている。まるで手品師にやられたみたいだ。誰かが落としたものを勘違いして拾つたのだが、顔が赤らむ思いがし、さぞかし持主は松木の咄嗟の行為を羨ましいと思つたに違いない。人通りの少ない階段の下に立ち止まつて、どうすべき迷つていと声をかけられた。

「その雑誌は俺のだけだ」

名乗る人を見て二度びつくりした。その男は隣の山野だつた。

「自分が落としたものとはばかり思つて……」松木は言い訳をした。

「拾おうとしたら、そつちの方が早くて」

「それは申し訳ない」

「凄いな早業だつたよ」

蔑んだような薄笑いを浮かべ、その表情が嫌味そのもので今も忘れられない。

隣人はアパートの周辺で顔を合わせても松木には無関心で、あの時の乗客と同じ人物だとは気がついてい

ない。知つていたとしてもどうでもいいことらしい。いつの間にか性の声もマンネリ化して日常のありふれた物音の一つでしかなかった。男女は半年くらいでいなくなり、松木は夢丸荘で四年間過ごした。

江東区のD町は静かな町で、植栽も豊富に見られ、シデやケヤキやカヤなどが茂つていた。松木家は二階にあり、隣近所の人たちは当たり触りのない人達だつた。三十三歳の松木と四歳下の妻と幼稚園児の娘と三人暮らしである。しかし松木はここでも誰とも付き合ふようなことはなく、もつとも男同士で交流している住民はあまりない。

日々を経るにつれて気になつていた右隣の男のことが分つて来た。やつぱり恋人とバトミントンをしていた凡庸な若者だつた。中肉中背、丸顔で額が広く、嫌味な顔つきをしており、何よりも山野姓だから本人だろう。もつとも細君はその頃の女ではない。のぶ子にその話をしたら、

「知らん顔をしていれればいいのよ」

「感じが悪いんだよ」

「そのうち慣れるわ」

「これから何があるか分からないぜ」

「何も無いわよ」

のぶ子は平然としているが、隣同士というだけで居心地が悪かった。それだけでなく山野の女房もカンに障りだし、何よりも笑い声が気に入らない。彼女は何が楽しいのか、年中笑っていてその声は耳にするだけでイビツに響いた。日によって気にする時もしない時もあり、ある一時期には妄執のように取りついて来た。どうしてこんなに神経質になるのか自分でも分らなくて、もしかしたら鬱ではないかと疑った。ますます亢進しつつあり、情緒不安定がひどく、その日も夕食を食べていると、

「アハハハ」

高笑いが聞こえて来た。鉄の塊が廊下を執拗に転がっていく音に似ていて気分が悪い。

「ああ、またか。おい締めてくれ」

「締めたら暑いじゃん」

娘の理沙が口を尖らせる。のぶ子は仕方なさそうに立ち上がり、サツシの窓をそっと動かした。隣の山野家とはコンクリート一枚で隣り合わせになっていて両家とも窓を開け放っておくと物音がもろに響いてくる。

「みんな、鈍感だなあ。あの胸糞悪い声を聞いていて、気分悪くならないのか」

「別に鈍感じゃないけど、いちいち気にしていたら、

始まらないわ」

「理紗はどう思う？」

松木は六歳の娘に聞いた。

「私もオバサンの笑い方、嫌いなもの」

「そうだろう。理紗だったら何か感じてはいるはずだと思っていたよ」松木は共感者を得て勢いづいた。

「あの笑い方はごまかしなんだよ。如何にも一家団圓を楽しんでいますと言わぬばかりだけど、あれは無意識の演技だよ。玄関先で手ごわそうな相手と話している時なんかアハハハの連続だからな」

「でも私はお父さんほどじゃないよ」

「山野さんの奥さんは、自律神経失調だから、仕方がないのよ」

「弱いくせに笑い声は攻撃的だよ」

「得てしてそういうものよ」

松木は大抵の音には無頓着で、上の階から聞こえてくるピアノの音も気にならないのに、どういう訳か隣の笑い声には異様なくらいに反応した。そのためか好ましくない感情が増幅し、亭主は言うまでもなく、息子も好感がもてない。息子の健一は理紗と同年で、同じ幼稚園に通っており、こましゃくかれていてどことなく女の子っぽい。いつだったか理紗がいじめられて

帰って来たことがあり、すると健一は気になったのか、玄関に顔を覗かせ、

「理紗ちゃん、泣かないで。いい物を買ってあげるから、こつちにおいで」

大人の便法を駆使して機嫌を取っている。幼稚園児の小賢しいおためごかしに松木はとたんにカツとなった。

「いい物を買ってあげるんだって。生意気言うな」

健一は松木の顔を見ると、慌てて自分の家に駆け込んだ。台所仕事をしていたのぶ子が松木の部屋に飛んできた。

「何てことを言うのよ。大人が向きになることないわ」

「俺は子供でも許せん」

「お隣と関係が悪くなったら、どうするの」

「それは困るけどな」

「私だって悩むわ」

松木は気が咎めた。それからというもの健一は歩廊ですれ違ふと顔を伏せ、肩を衣文掛けのように強張らせて歩いた。体中で松木を拒んでいるのだ。

小学校に上がると幾分和らいだのか回覧版を届けに来るようになった。だが松木はどうにも気に入らなくて、些細なことでも悪口を言わずにはいられなかった。

学校の夏休みの日、玄関先で健一の声がした。

「これ」と妻に何か渡している。

「あら、有難う。どこへ行って来たの」

「タンザワ」

「丹沢に行つて来たの。よかつたわね」

妻がわざとらしく言い、健一が帰ると松木は台所に顔を出して、土産の饅頭を確認し、

「健一に持って来させるなんて、なおざりだな」

「誰でもいいわよ」

「あの女は俺を避けているからな」

「それはないわ。あなたが拘っているだけよ」

確かにそうかもしれない。それに暑さと仕事の疲れで怒りっぽくなっているのだ、やっぱり鬱だろう。次の日もイライラしていて会社から帰宅し、デツキチュアに体を横たえていたら不意に隣から笑い声が聞こえた。例の鉄の玉を転がすような非人間的な笑いだ。松木はベッドに潜りこんで両耳をふさいだ。けれども笑い声は魔物のようにまつわりついて来て、彼は我慢できず台所に行つて、

「何だ、あの笑い方は」のぶ子にぶつめた。

「他所様の笑い声なんて、どうにもならないわよ」

「俺はあの女に馬鹿にされているような気がするな」

彼は衝動的に食卓の饅頭の箱を床に叩きつけた。次に両足に乗せ、体重をかけて押し潰し、その上ペしゃんこの箱を力いっぱい捻った。のぶ子は夫のすることを黙って見ているだけでいつもと違って一言も発しない。そして夫に協力するように饅頭の箱から残りの中身を取り出して、シンクの籠に捨てた。松木はそんな妻が気味悪くなつて、彼は冷静になつてから妻に尋ねた。

「君は啞然としたらう」

「別に。それで気がすめばいいわ」

「もしかして、俺のしたことを肯定しているんじゃないのか」

のぶ子は松木と違つて平衡感覚に富み、少々なことで揺らぐことはないから、その妻が夫の行為を容認しているとなると、却つて不安である。

「のぶ子も山野さんが嫌いだろう」

「好意を持つているとは言えないわ」

「そうだとしたら、俺には辛いな。妻が夫の同類として共倒れだからな」

「何を心配しているのよ。クヨクヨしないで忘れなさい」

「だけど、悔しいよ。俺、三個も食べたからな」

「よく考えてから、食べればよかつたのよ」

いっぺんに三個も食べるのはどうかしている。餡の嫌いな理紗は初めから見向きもしないし、のぶ子も口にしなかつた。

夏が終わり秋口になると、隣の笑い声が何となく耳に入らなくなつた。自律神経失調が改善されたのかもしれない。隣人が不幸よりも幸福の方が周りを明るくするから、いいに決まつている。育ちが悪かつたり、貧乏に翻弄されている人間は歪んでしまいがちだ。山野の細君がいい方向に向かうのは大歓迎である。

しばらくして隣家に異変が起つたことを知つた。

山野夫妻が離婚したというのである。夫婦は子供が焼きもちを焼くほど仲がよく、近所でも《笑いの絶えない明るい家庭》というのが定評である。だが真相は違つていた。理由は亭主の女関係のようので、男だけが家を出て行つた。

「俺はあの笑い方に問題があると思うね。男から見たら、セクシーじゃない、亭主が妻以外の女を作つても仕方がないな」

「笑い方なんか関係ないわ」

「あるよ。嘘つぱちが崩壊して、実体が現れたんだ」  
あんな旦那がいなくなつてよかつた。しかしのぶ子

にはショックらしく、すぐに話す気になれず、衝撃が引いてから伝えた。松木にしたら憑き物が落ちたように心が軽くなった。細君の笑い声など何ほどでもなく、頓着しなくなった。きつと隣人の離婚が松木家に平和をもたらしたのだろう。

「僕は君で満足しているから」

「当たり前よ」

月日は流れ、年齢を重ね、一人娘の理沙は短大を卒業すると社会人になり結婚もした。隣家の息子も大学を卒業し、どこかの会社に入社して家にはいなくなつた。

松木は時々ストレスに負けながら何とか切り抜けて来た。会社を定年退職して間もなくである。その日、強風が荒れくるっていた。働いている隣家の山野芳江から電話がかかってきた。妻もパートに出ていて松木しかない。山野芳江が恐縮したように、

「お願いがあります。私、ストーブを付けっ放しにして来たような気がして、気になってならないんです」

見て来てほしいと頼むのだった。午前中から風が吹き出した。こういう心理は分らない訳ではない。切羽詰った芳江が急に色気のある女に思えて来た。

「ああ、いいですよ」

松木は快諾してひさし屋根を伝わってサッシの窓から中に入った。一目見てストーブなど付いていなかった。六畳の部屋にベッドがあり、羽毛布団がかけてあった。

松木は素早くめくつてその中に入って、仰向けに寝た。かすかに女の、いや芳江の匂いがした。その時ズボンの携帯が鳴った。取り出して耳に当てたら何かの宣伝の録音の声だった。急いで切つてジャンパーのポケットに押し込んだ。

松木は山野芳江が、「適当な時間にこちらかけさせていただきます」と言ったのを思い出し、急いでベッドから降りて、布団を直してから外に出た。自分の家に戻ると、間もなくして電話がかかってきた。息がはずんでいるが抑えて受話器を耳に当てた。

「ストーブはついておりませんでした」

彼はあえて笑い声を立てながら答えた。

「そうですか、よかったです。有難うございました」

「いいえ、一向に構いません」

「お手数をかけました」

そんなやり取りをして電話を切った時はほっとした後になって自分の好きな舞いが恥ずかしくなった。何でも無いことだから気にするようなことではないだ

ろう。

しかしその日のうち物事が露わになり、ひと悶着置き  
そうだった。妻がケータイを差し出し、

「あなた、これ落としたでしょう」と言うのだった。

「エッ、どこにあった？」

「郵便受けに入っていたわ」

誰かが拾って入れておいたのだろう、のぶ子はそう  
思っ何事もなさそうな顔をしている。むろん、芳江  
がそうなのだ。

「気をつけなきや駄目よ」

「ああ、迂闊だった」

その後、山野芳江と顔を合わせても何も言わなかつ  
た。けれどもいつか妻に話すかもしれない。一ヶ月ほ  
ど経つてもそのぶ子はその話はしなかった。芳江は自分  
のベッドにあったことを伝えていないのだ。彼はどう  
解釈しているのか分らないままだった。